

甲狀腺摘出ノ結核ニ及ボス影響

大阪醫科大學肺癆科教室(主任佐多博士)

川 上 理 作 述

目 次

- 一、緒 論
- 二、検査方法ノ概要
- 三、検査方法
 - 甲、検査材料
 - 乙、検査準備
 - イ、甲狀腺ノ摘出
 - ロ、菌液ノ製法
- 丙、試験方法
- 丁、觀察方法
- 四、試験成績
 - 甲、三週撲殺試験
 - 乙、其後自然死ニ至ル迄ノ觀察
- 五、總括及考案
- 六、結 論

一、緒 論

結核ノ感染ニ向テ體質ガ如何ニ重要ノ素因ヲ構成スルカハ明白ニ過ギタルノ事實ナルモ更ニ進ミテ其體質ヲ構成スル因由ヲ追究スルトキハ各般ノ疑問其間ニ横ハルモノ尠ラズ。

吾人ハ今ヤ體質構成ノ因子ヲ追究シ其要件ヲ分析シ以テ是レガ結核感染ト結核病機ニ對スル關係如何ヲ觀察スルノ必要ヲ感ズルコト切ナリ。

余ハ今回恩師佐多博士ノ提案ニ基キ熊谷博士ノ指導ノ下ニ、コノ素因或ハ體質ノ一因子ヲ構成スルト見ルベキ内分泌、特ニ甲狀腺内分泌ト結核トノ關係ヲ明カニセントシテ先ヅ其ノ全摘出(部分的摘出ニ對シテ云フ)ト結核感染トノ關係ヲ觀察セントシテ本實驗ヲ遂行シタリ、然レドモ此ノ實驗ハ尙ホ未ダ準備試驗ノ範圍ヲ脫スルコト能ハザルモノニシテ本觀察ノ全般ヲ盡サンニハ一層ノ研究ヲ要シ且ツ今後ノ努力ニ待ツベキモノ多シトス。

二、實驗方法ノ概要

本觀察ハ元ヨリ實驗的方法ニ依レリ、用ヒタル動物ハ結核ニ敏感ナル「モルモット」ニシテ其ノ數三十頭ヲ使用シ、是レヲ次ノ三群ニ分チ觀察セリ。

一、甲狀腺ヲ摘出シ、コレニ結核菌ヲ注射シタルモノ

二、甲狀腺ノ摘出ヲ行ハズシテコレニ結核菌ヲ注射シタルモノ

三、甲狀腺ヲ摘出シタルモノニシテ、結核菌ノ注射ヲ行ハザルモノ

上記三群ノ中(一)(二)ハ本試驗ノ目的ニシテ第(三)ハ其ノ對照トシテ設ケタリ。

コノ三群ニ付キテ、體重、重要ナル臨牀的所見、即チ榮養狀態、生存期間等ノ外其ノ病理解剖的所見ヲ觀察スルコト、ナセリ、然シテ其ノ初期ノ病變ヲ明瞭ナラシムルガ爲メニ、先第三週ニ於テ(一)(二)群ニツキ三匹ヅ、撲殺シ其ノ解剖的所見ヲ檢セリ。其ノ殘リノ動物ニ付キテハ其ノ自然死ニ至ルマデコレヲ上記方法ニ依リテ觀察シ、其ノ全試驗ヲ終了スル迄約九ヶ月ノ時間ヲ消費セリ。

三、檢査方法及ビ其ノ材料

甲、檢査材料

一、動物、動物ハ結核ノ試驗ニ最モ便利ナル「モルモット」ヲ使用セリ。此際成育セルモノハ結核ノ進行徐々ニシテ試験期間ノ長キヲ要スル不利アルヲ以テ、未ダ發育不完全ナル體重約三〇〇瓦内外ノモノヲ選ベリ。

二、結核菌 感染ニ使用シタル結核菌ハ竹尾結核研究所所有ノ佐多系AIノ人型結核菌ニシテ、其ノ「グリセリン」寒天培養ノ移植後約四十日ヲ經過セルモノナリ。

乙、檢査準備

イ、甲狀腺ノ摘出

甲狀腺ノ摘出ハ可ナリ困難ナル手術ナルモ、余ハ熊谷博士ノ手術式ヲ應用セリ。先ヅ「モルモット」ヲ手術臺上ニ横ヘ、

背位トナシ、四肢及頭ヲ固ク臺ニ結ビ付ケ、後、甲狀腺部ノ毛ヲ抜き去リ、其ノ部分ヲ好ク「アルコホル」ヲ用ヒ消毒シ、然ル後ニ正中線ニ一致シテ皮膚ニ約二乃至三糎ノ長サヲ有スル切開ヲ加ヘ、其ノ下ニ現ハレル所ノ胸腺及ビ頸部筋肉群ヲ押し分ケ尙深ク後方ニ進ム時ハ丁度喉頭ノ側後方ニ當リ、血色鮮カナル、半透明ノ扁平橢圓形ノ一對ノ臟器ヲ發見スベシ、此レ即チ目的ノ甲狀腺ナリ。余ハコレヲ次ノ如キ方法ニヨリテ摘出セリ、即チ此ノ臟器ヲ輕ク「ビンセット」ヲ用ヒテ挾ミテ稍々舉上シ、一方縫合絲ヲ以テ梁ヲ作り、コレヲ上記ノ如ク舉上シタル甲狀腺ニ懸ケテ、其ノ實質ヲ殘サバル様深ク是レヲ結紮シ、出血ナキヲ確メ、後缺ヲ以テ甲狀腺ヲ切離セリ。此ノ場合同時ニ甲狀腺動脈ヲモ切斷スルヲ以テ其ノ切離腺ハ甲狀腺側ニ選ブコトハ勿論ナリ。如斯クシテ手術野ニ出血ナキ時ハ皮膚ヲ縫合シ、後「モルモット」ノ手術死ヲ防止スルノ目的ヲ以テ、滅菌食鹽水約二乃至三坵ヲ腹腔内ニ注入セリ。

ロ、菌液ノ製法

灼熱殺菌セル白金耳ヲ用ヒ結核菌ノ「コロニー」ヲ搔キ取り、コレヲ脫水紙ノ上デ輕キ壓ヲ加ヘテ脫水シ、後化學天秤ヲ用ヒ其ノ重量ヲ精密ニ計リ、後瑪瑙ノ乳鉢中ニ入レ、是レニ一滴ノ殺菌食鹽水ヲ滴下シ、好ク研磨シツ、菌乳劑ヲ作り、丁度食鹽水一坵ノ中ニ〇・五坵ノ菌量ヲ含有セシムル程度ニ前記食鹽水ヲ加ヘテ稀釋シ、所要ノ菌液トナス。

丙、試驗方法

上記三群ニ就テ、甲狀腺摘出後約一週間ニシテ各群(對照群ヲ殘ス)ニ生結核菌ノ注射ヲ行ヒタリ。其ノ量ハ一坵ニシテ〇・五坵ノ菌量ヲ含ムモノトス。手術後結核菌接種迄ニ約一週間ノ時間ヲ置キタルハ、其ノ手術死ヲ除外セント企テタルニ外ナラズ。注射ノ部位ハ腹部ニテ左側上腿ニ近キ部ヲ選ベリ、此ノ場合モ亦其ノ部ノ毛ヲ一錢銅貨大ノ大サニ抜き去リ「アルコホル」ヲ以テ消毒シ、雜菌ノ混入スルヲ防止セリ。

丁、觀察方法

上記ノ如ク處置セル「モルモット」ノ三群ニ就キ約五乃至一〇日ノ間隔ヲ置キテ、其ノ體重、局所淋巴腺ノ狀態、注射部位ノ變化等ヲ觀察セリ、次ニ極メテ初期ノ病變ヲ檢査セントシテ(一)(二)群中ヨリ各三頭ヲ取り出シ、コレヲ撲殺シ其

116

第一表 三週間後、撲殺セルモノ、臨牀竝ニ解剖的所見

[illegible]

二、注射部位ノ變化。注射部位ニ現ハレタル硬結ハ甲狀腺ヲ摘出セルモノニ於テハ健常ナルモノニ菌感染ヲ行ヒタル場合ニ比シテ稍々早ク現ハレ、其ノ大サハ一般ニ廣キガ如キ感アリ、又注射部位ニ接近シテ新膿瘍ヲ作ルコトモ亦甲狀腺摘出ヲ行ヘルモノニ是レヲ發見セリ。

三、局所淋巴腺ノ變化。注射部位ノ淋巴腺ノ腫大ハ各組ニ於テ殆ンド大差ナクコレヲ發見セリ。反側淋巴腺ノ腫大ハ甲狀腺ヲ摘出セルモノニ是レヲ見タリ。

四、内臓ノ變化。脾臓、肝臓等ハ甲狀腺摘出ノ如何ニ拘ラズ著明ナル結核性病變ヲ示ス。次ニ肺ニ於ケル病變ハ何レニ於テモ稍々輕症ナルモ、其度ハ亦甲狀腺ヲ摘出シタルモノニ稍々著明ナルガ如シ。又甲狀腺ヲ摘出セルモノニ腎臓ニ結節ヲ現スモノヲ見タリ。

然シテ「モルモット」ニ來ル腎結核ニ關シテハレーウニスタイン氏ニ依レバ泌尿生殖器、骨、關節、粘膜又ハ腦膜ト共ニ腎臓ニハ結核ノ來ルコトナシト云ヒ、家兎ニ於テハ人類結核ニ似タル像ヲ表ハシ、腎、骨、關節、睪丸等ヲ侵スト云フヲ以テ見レバ此ノ場合「モルモット」ニ最モ少シトセラル、腎結核ガ甲狀腺ヲ摘出セルモノニ發見スルコトハ或ハ結核ノ臟器感受性ノ上ニ或關係ヲ有スルモノナラザルカ。

五、組織學的所見。結核節ノ組織學的構造ヲ精檢スルニ脾、肝等ノ實質性臟器ニ現ハレタル結節ハ一般ニ大差ナキモ、甲狀腺ノ摘出ヲ行ヘルモノニ於ケル結節ハ淋巴球少ク上皮様細胞ガ其ノ結節ノ主成分ヲナスガ如キ像ヲ呈シタルモノヲ往々發見セリ。

二、殘餘動物ノ自然死ニ至ル迄ノ觀察

三週間後ニ撲殺シタル殘リノ動物ハ其ノ自然死ニ放置シ、約五乃至一〇日置キニ其ノ體重ヲ計リ、其ノ間斃死セルモノニ就テハコレヲ解剖シ、其ノ肉眼的及ビ組織學的ノ變化ヲ觀察セリ、其ノ成績ハ第二表及ビ第三表ニ示スガ如シ。

第二表 試驗動物ノ體重及ビ其ノ生存期間

[illegible]

今第二表ノ體重ヲ通覽スルニ、甲狀腺ヲ摘出シ菌ノ注射ヲ行ハザルモノニ於テ其ノ平均價ハ最大ナリ。各組ヲ其ノ順ニ列記スレバ左ノ如シ。

- | | | |
|---------------------|------------------|------|
| 一、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ | 三〇八瓦 |
| 二、 | 甲狀腺ヲ摘出セズ菌ヲ注射セルモノ | 四一〇瓦 |
| 三、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザルモノ | 四二一瓦 |
| 次ニ各組ノ動物ノ平均生存期間ヲ求ムレバ | | |

- | | | |
|----|------------------|------|
| 一、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ | 九八日 |
| 二、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザルモノ | 一三四日 |
| 三、 | 甲狀腺ヲ摘出セズ菌ヲ注射セルモノ | 一五三日 |
- トナル、從ツテ結核感染ノ如何ニ拘ラズ、甲狀腺摘出ヲ行ヒタル動物ハ其ノ生存期間短キモノナリト云フコトヲ得ベシ。
- 最後ニ生存期間ト體重トノ平均價ノ積ヲ求ムレバ左ノ如シ。

- | | | |
|----|------------------|-------|
| 一、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ | 三〇一八四 |
| 二、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザルモノ | 五六四一四 |
| 三、 | 甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ | 六二七三〇 |
- 次ニ自然死ニ至リタル動物ノ解剖の所見ヲ表示スレバ次ノ如シ。

第三表 自然死ニ至リタル試験動物ノ解剖的所見

組	検査部	甲状腺摘出ノ結核ニ及ボス影響				
		VI	IV	III	V	VI
動物	物動					
體重	體重					
日生數存	日生數存	五三日	三三〇 瓦 一六一日	一一九日	二八〇 瓦 九七日	七三日
注射部位	ノ注射部位	ハ硬ヲ癆小 結其附ア ニニ著リ 表稍膿潰	變ヲ癆周 化見圖 ナシ硬 シ外結廣	リ部ニ潰麻 發認瘍實 毛メヲ大 セー僅ノ	テ癆リノ小 治痕其潰指 癒ヲノ瘍頭 ス以部ア大	癒ヲ分リ膿腹 セ以ハ癆筋 テ癆大内 治痕部アニ
注射部位	淋注射部位	ス四小 個豆 腺大ニ	血シ三小 且個豆 ツ腫大 充大ニ	ニ酪シ大 陷性切ニ ル變面腫 化乾大豆	ヲ酪ス三小 現性切個豆 ハ變面腫大 ス性乾大ニ	ス二小 個豆 腫大 大ニ
反巴腺側	淋反巴腺側	ス二米 個粒 腫大ニ		タ化乾一シ大 リヲ酪ハ其ニ個 認性中中腫小 メ變央ノ大豆	血シ大三 且ニ個 ツ腫米 充大粒	充血ス
腹膜	腹膜	アテ平 リ稍滑 光澤ニシ	リテ平 光澤ニ アシ	リテ平 光澤ニ アシ	アテ平 リ稍滑 光澤ニシ	リテ平 光澤ニ アシ
脾臟	脾臟	部化テ面腫十 アニ乾群大數 リ陷酪ヲシ、大 性性ナ切ニ 變變シ切ニ	分ニ乾ニ腫約 ヲ陷酪大大十 認酪性イシ倍 ム變性ナ切大 部性ル面ニ	漏ヨ面斑數ニ約 ヲリヨヲノ腫十 ステリ作白大數 。膿壓ル色シ倍 ヲニ切ノ多大	シムヲ黃腫約 切多色大十 面數ノシ倍 亦ニ斑表大 同認點面ニ	ヲ面ヲノノモー強 漏一現斑表大見ク 部ハ點面ナリヨ腫 シ隆黃肝大 膿切起色其リシ
肋膜腔	肋膜腔	入ヲ黃 ル小色 量ノ 液	認異 メズ 狀液 ヲ	ル等ノ黃 度液帶 ニヲ赤 入中色	シ異 狀液 ナ	量ノ黃 ニ液帶 入ヲ赤 ル小色
肺臟	肺臟	結切ク容陷表 節面少積凹シ ヲ多ニ甚ソノ 見數シダ其ノ ルノテシノ點ヲ	スナ所於シシ シ々テニ小切 散群結面血 在ヲ節ニ血ナ	ヲ白ズ比 散色表較 見ノ面的 ス結ニ侵 節灰レ	ス等色粒兩 。度ニ斑ノ共 散點ニニ 見中黃粟	ノノ般其 斑白ニノ ヲ灰粟表 見黃粒面 ル色大一
副腎及ビ	副腎及ビ	メ狀共 ズヲニ 認異	シ變 化ナ	ナニ外血多 シ變特セ少 化別ル充	メ化共 ズヲニ 認變	ス少副變共 充腎ナニ著 血多シ
腹腔内	腹腔内	入等液黃 度ヲラ色 ニ中ノ	ナシ異 狀液	リ赤其入液小 色色ル體量 ナ黃ヲノ	在度液黃 スニ中色 存等ノ	ナシ異 狀液
肝臟	肝臟	シム斑灰門テ切腫 ル點白ニ特面大 所ヲ近シ肝於 多認ノク	ス化ノ切散色表腫 ヲ乾面在ノ面大 現酪多シ斑灰 ハ變數ハ點白	點白無 ヲ色數 見ノノ ル斑灰	見モ面現ノ面腫 ルコニハ結大シ ヲ於シ節灰シ テ切ヲ白色表	面現ノ面腫 亦ハ結灰大シ 同ハ結白面 シ切切白色表

甲狀腺ヲ摘出セズ	結核菌ヲ接種セルモノ	接種セルモノ	甲狀腺ヲ摘出セズ
Ⅴ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
三 一 五 瓦 一 一 九 日	三 六 五 瓦 一 七 八 日	三 五 五 瓦 二 一 〇 日	四 〇 〇 瓦 二 四 一 日
小ナル潰瘍ヲ現ハシ、乾燥シ、毛モシ、周圍乾シ、性酪性變アリ	皮膚大ニ腫レ、小指ノ現ハシ、乾燥ス	小指ノ現ハシ、乾燥ス	小豆大ニ腫レ、三切個大ニ、明シ、性酪性變アリ
稍腫大シ、充血ス	米粒大ニ、豆大ニ、小豆大ニ、充血ス	稍腫脹シ、充血ス	小豆大ニ、二個大ニ、充血ス
平滑ニシ、リテ光澤アリ	平滑ニシ、リテ光澤アリ	變化ヲ認メズ	平滑ニシ、網アテ、ナシモリ、變化大シ
十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ	十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ	十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ	十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ、十倍大ニ腫レ
異狀液ナシ	異狀液ナシ	異狀液ナシ	異狀液ナシ
所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル
左側腎ニ於テ、多シ、充ル、變シ、ナシ	左側腎ニ於テ、多シ、充ル、變シ、ナシ	左側腎ニ於テ、多シ、充ル、變シ、ナシ	左側腎ニ於テ、多シ、充ル、變シ、ナシ
異狀液ナシ	異狀液ナシ	異狀液ナシ	異狀液ナシ
所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル
所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル	所々ニ結核ヲ見ル

五、總括及考案

一、試驗動物ノ榮養狀態及體重

各群ヲ其ノ動物ノ榮養狀態及體重ノ上ヨリ見テ、其ノ良好ナルモノヨリ順序ニ記載スレバ

一、甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザルモノ 四二一瓦

二、甲狀腺ヲ摘出セズ菌ヲ注射セルモノ 四一〇瓦

三、甲狀腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ 三〇八瓦

コレヲ以テ見レバ甲狀腺ノ摘出其者ガ試驗動物ノ體重及其ノ榮養狀態ヲ不良ナラシメ、其狀アタカモ、健常試驗動物ニ

菌ヲ注射セルガ如キ感アリ。甲状腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノニ至リテハ、此等二群ニ比シテ特ニ著明ナル體重ノ減少及榮養狀態ノ不良ナル微著シ、即チ體重及榮養狀態ノ上ヨリ論ズレバ、甲状腺ノ摘出ハ稍々著明ニ結核ノ病勢ヲ助長スルモノナリト云フコトヲ得ベシ。

二、試驗動物ノ生存期間

各群ニ於ケル試驗動物ノ平均生存期間ヲ尋テ、其ノ長キモノヨリ列記セバ左ノ如シ。

一、甲状腺ヲ摘出セズ菌ヲ注射セルモノ 一五三日

二、甲状腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザルモノ 一三四日

三、甲状腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ 九八日

生存期間ノ上ヨリ本試驗ヲ觀察スル時ハ甲状腺ノ摘出其者可ナリ其ノ試驗動物ノ生存期間ヲ短縮シ、健常「モルモ」ト「結核トセシモノ」ニ比スレバ約二百日間ノ生命ノ短縮ヲ現ハセリ、然カモコノ甲状腺ノ摘出セルモノニ結核菌ヲ接種シタル時ハ更ニ其ノ生存期間短ク其ノ差約三十六日ナリ。コレヲ以テ見レバ甲状腺ノ摘出ハ結核試驗動物ノ生存期間ヲ著シク短縮セシムルモノナリト云フコトヲ得。

三、試驗動物ノ生活容量

以上述べタル成績ニヨレバ、先ヅ甲状腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザル一群ニ就テ觀察スルニ、其ノ體重及ビ榮養狀態ハ甲状腺ヲ摘出セズ菌ヲ注射セルモノニ比シ佳良ナルモ、其ノ生存期間ハコレニ反シテ短縮セリ。從ツテ此ノ場合此ノ兩群ノ差違ヲ現ハス標準ナシ、コ、ニ於テ余ハ各群ノ生存期間ノ平均數ト體重ノ平均數トヲ合シタル數量的ノ差ヲ明瞭ニ現ハス爲メニ此等ニ平均數ノ積ヲ求メ、コレヲ便宜上生活容量ト名ツケ、此ノ數値ヲ求メ、數ノ大ナルモノヨリ記載スレバ左ノ如シ。

一、甲状腺ヲ摘出セズ菌ヲ注射セルモノ 六二七三〇

二、甲状腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セザルモノ 五六四一四

三、甲状腺ヲ摘出シ菌ヲ注射セルモノ 三〇一八四

所謂余ノ生活容量ヨリ觀察スル時ハ、甲狀腺ノ摘出ハ可ナリ試驗動物ニ取ツテ生活力ノ減退ヲ招來スルモノシテ、其ノ狀、輕症ナル結核感染ヨリモヨリ重大ナル影響ヲ與フルモノナリト見ルコトヲ得ベシ。

此ノ生存期間ニ於テ特ニ余ノ注意ヲ惹キタルコトハ同ジク甲狀腺ヲ摘出セル動物ナルニモ拘ラズ、結核菌ヲ接種セルモノガ其ノ初期ニ於テ反ツテコレヲ接種セザルモノニ比シ抵抗力ノ強クシテ、斃死ノ割合ニ少ナカリシコトナリ。コレハ一見或ハ輕微ナル結核ノ感染ハ反ツテ其ノ生體ニ對シテ抵抗力ヲ増加セシムルガ如ク作用スルモノニアラザルカヲ疑ハシメタリ。

四、試驗動物ノ解剖的所見

一、注射部位ノ變化及局所淋巴腺

此等ノ部分ヲ觀察スルニ各群ニ於テ大差ナキモ、甲狀腺摘出ヲ行ヘル試驗動物ニ於テハ局所淋巴腺以外ニ可ナリ遠隔ノ淋巴腺ノ腫大ヲ伴ヘルモノ多キヲ見タリ、然シテ淋巴腺ハ菌侵入ニ對スル關所トモ見ルベキモノナルガ、此ノ關所ヲ甲狀腺機能不完全ナル場合ニハ菌ハ難ナク通過シ得ルガ如キ感アラシム、此ノ關係ハ單ニ局所淋巴腺ノミナラズ、其他菌ノ注射部位ノ病變ニ見ルモ明カニシテ、單ニ淋巴腺ニ限ラズ一般組織モ甲狀腺機能脫失ニヨリテ菌ノ通過性ヲ増加スルガ如シ。

二、内臓ノ解剖的所見

肝、脾、腹腔内及胸腔内淋巴腺竝ニ肺臟等ノ末期ニ於ケル結核性病變ノ輕重ヲ判定スルコトハ其變化ノ特ニ著明ナル差違ヲ現ハス場合ハ例外トシテ少クトモ其ノ輕微ナル差異ヲ發見スルコトハ寧ロ不可能ナリ。

然レドコレヲ組織學的ニ檢査スレバ、二三ノ相違スル點ヲ發見セリ、即チ甲狀腺ヲ摘出セザルモノハ、コレヲ摘出シタルモノニ比シテ其ノ結核病竈ニ於ケル結締組織ノ増殖盛ニシテ一般ニ治愈轉機旺盛ナリ。

次ニ興味アルコトハ、上記第三週撲殺試驗ニ於テ述ベタル如ク、此ノ場合ニ於テモ一二ノ例ニ於テ結節樣變化ヲ彼ノ「モルモット」ニ最モ少シト云ハル、腎及副腎ニ發見セシコトナリ。

尙ホ追記セザルベカラザルコトハ粘膜ノ炎症ナリトス。即チ甲状腺摘出ヲ行ヘルモノハ行ハザルモノニ比シテ腹腔内ニ異常液ノ滯溜セルモノ多キガ如シ、殊ニ自然死ニ至リタルモノニ於テ其ノ狀顯著ナリ、此ノ事實ハ甲状腺機能ノ脫失カ滲出性素質ノ成立ヲ助クルカ或ハ免疫ノ成立遲キガ爲メニ健常ナルモノニ比シテ遲レテ浸出性狀態ヲ誘引スルカ、或ハ甲状腺機能ノ脫失ガ浸出物ノ吸收ヲ困難ナラシムルニ依ルカ更ニ研究ヲ要スル事項ナリトス。

六 結 論

一、甲状腺ノ摘出ヲ行フモ動物ハ直ニ斃死スルコト無キモ其生活力ハ甚ダシク不安定トナル。

二、甲状腺ノ摘出ヲ行ヒタル動物「モルモット」ヲ結核ニ感染セシムル時ハ、コレヲ摘出セザルモノヲ結核ト爲セルモノニ比シテ次ノ如キ特徴ヲ有ス。

一、體重ノ増加少キコト(幼獸ニ於テ)。

二、生存期間ノ短キコト。

三、結核ノ進行ヨリ速カナルコト。

四、組織學上、結核病竈ノ治癒轉機少キコト。

五、滲出性變化ノ著明ナルコト。

摺筆ニ臨ミ恩師佐多博士、熊谷博士ノ御懇篤ナル御指導ト親シク本稿ノ校閲ノ勞ヲ取ラレタルコトヲ深ク感謝ス。

(本稿大正十三年三月完了)

参 考 書

- 1) A. Hiehl, Inere Sekretion 1922. 2) E. Löwenstein, Vorlesungen über Tuberkulose 1920.